

古サクソン語（古低ドイツ語） 簡約文法の試み

石 川 光 庸

以下は、9世紀の北ドイツで成立した頭韻詩 Heliand（福音書のキリスト伝をゲルマン的詩型と語法とで語ったもの）や、Genesis 翻訳断片を、原文で読むための簡約文法 Minimalgrammatik の試みである。キリストの生涯は、ほぼ同じ頃に古高ドイツ語の散文翻訳 Tatian や、Otfrid の脚韻詩によっても語られているが、それらとは異なってゲルマンの英雄歌謡の面影を詩型にも思想にも色濃くとどめたこの低地ドイツ語作品 Heliand には、古英語の Beowulf などにも通じる独特な魅力がある。たとえ古高ドイツ語や古英語の知識がなくとも、それどころか中高ドイツ語や中英語の知識も持たなくとも、現代のドイツ語と英語のひととおりの知識があれば、この興味深い Heliand（や Genesis）を曲りなりにも読むことができるようになる——そんないささか虫のよい要求に合った minimal な文法記述の試みがこれである。当然 Wissenschaft としての通時的記述も、また共時的完全性も意図されていない。Holthausen をはじめとする多くの先学による文法書、入門書（次号「参考文献」参照）に負う点が非常に大きいことは当然であるが、同時に筆者のこれまでの古サクソン語との（あまり楽ではなかった）「つきあい」からおのずと生じた独断的記述も皆無ではない。

今回は発音と文法をあつかい、次号で文章論と詩型論にふれる予定である。

I 章 発音

§1. 母音

母音はほぼローマ字を読むように発音すればよい。ただし長母音と短母音の区別に留意しなければならない。以下では長母音は hūs のように (ː) であらわす。

a	fadar	「父」	(独 Vater, 英 father)
ā	māno	「月」	(独 Mond, 英 moon)
e	etan	「食べる」	(独 essen, 英 eat)
ē	hwē	「だれ」	(独 wer, 英 who)
i	fisk	「魚」	(独 Fisch, 英 fish)
ī	swīn	「豚」	(独 Schwein, 英 swine)
o	gold	「黄金」	(独 Gold, 英 gold)
ō	broðar	「兄弟」	(独 Bruder, 英 brother)
u	sunu	「息子」	(独 Sohn, 英 son)
ū	hūs	「家」	(独 Haus, 英 house)
au	thau	「習慣」	
ei	ei	「卵」	(独 Ei, 英 egg)
io	thiof	「どろぼう」	(独 Dieb, 英 thief)
iu	diubal	「悪魔」	(独 Teufel, 英 devil)

二重母音は最初の母音にアクセントを持つ。ei という二重母音は [ei] であり、現代ドイツ語のように [ai] と読んではならない。

§2 子音

子音は注意すべきものだけをあげる。

th (1) 語頭では英 three などと同じ無声の [θ] : thank 「恩恵, 感謝」
(独 Dank, 英 thank). (2) 語中と語末では有声の [ð] だが、この

場合は次項の ð であらわすのが普通.

- d 上記 th の有声音で英 then などの [ð] : brodar (独 Bruder, 英 brother)
- b f の有声音で英 voice などの [v] : geban (独 geben, 英 give)
- s (1) 語頭と語末では無声音 [s] だが, (2) 母音にはさまれると有声音 [z] となる. 語末でも d の前では有声音となる: (1) sunu (独 Sohn, 英 son), hūs (独 Haus, 英 house) ; (2) lesan [l'ézan] 「読む」(独 lesen), lōsda [ló:zda] 「解いた」(独 löste, 英 loosed/lost)
st-, sp- を現代ドイツ語のように [ʃt-], [ʃp-] と発音してはならない.

uu = w

- v しばしば b の代わりに用いられる: sivun 「7」(独 sieben, 英 seven)
- w たいてい uu であらわされ, 英 war などの [w] : wāpan 「武器」(独 Waffe, 英 weapon)
- z (1) Zacharias のような外国人名では s の有声音 [z]. (2) berto (独, 英 best), lezto (独 letzt, 英 last) などゲルマン系単語では [ts].
- r 舌先を強くふるわせる音で, のどひこ(懸よう垂)音ではない.
- h 常に発音される. (1) 語頭では [h] : hlūd [hlú:d] 「声高の」(独 laut, 英 loud). (2) 語中において子音の前に来るとき, および語末では [x] (ドイツ語 doch の -ch の音) : thoh (独 doch, 英 though), naht (独 Nacht, 英 night). ただし前舌母音 e, i の後へ来たときは [ʃ] (ドイツ語 ich の -ch の音) : sehs (独 sechs, 英 six), liht (独 Licht, 英 light)

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

qu 英 quite などと同じ [kw] : quik「活発な」(英 quick)

c ラテン借入語で、前舌母音 e, i の前に来るとき [ts] : kruci「十字架」(独 Kreuz, 英 cross)

sc =sk [sk] ただし10世紀末からは口蓋音の [ʃ] (独 schön などの sch) となる。

同子音の重複はそのまま重複して発音するのが、現在の英語やドイツ語とは異なる。たとえば minnion「愛する」の -nn- は、日本語で「みんな」というときの -nn- のように長く発音されなければならない。

§ 3 アクセント

すべての他のゲルマン語と同じく、アクセントは第一音節にあるのが原則である。ただし接頭語 bi-, far-, gi- などはアクセントをもたない。

II 章 語形論

I 名詞

§ 1 性, 数, 格

古サクソン語の名詞には男性 (Maskulinum, 略 *m.*), 女性 (Femininum, 略 *f.*), 中性 (Neutrum, 略 *n.*) の三種の性 (Genera) があり, また単数 (Singular, 略 *sgl.*), 複数 (Plural, 略 *pl.*) という数 (Numeri) の区別がある。性は多くの場合に文法上の性であり, 自然の性別とは一致しないことが珍しくない。格 (Kasus) は 1 格 (主格, Nominativ), 2 格 (属格, Genitiv), 3 格 (与格, Dativ), 4 格 (対格, Akkusativ) の四種がある。それぞれの格はほぼ日本語の格助詞「…が」, 「…に」, 「…を」の機能に対応するが, その他にも多様な意味をもつので, 辞書の説明に注意して慣れる必要がある。またいくつかの名詞の単数には

具格(助格, Instrumental)が固定表現として残存している: wordu「言葉で」

§ 2 強変化名詞と弱変化名詞

強変化名詞は母音変化名詞ともいわれ, ゲルマン祖語の段階で語幹が母音で終わっていたもの, たとえば *daga-z (独 Tag, 英 day) などである。弱変化は子音変化ともいわれ, ゲルマン祖語で語幹が子音で終わっていたもの, たとえば *tungōn「舌」(独 Zunge, 英 tongue) である。強変化名詞がかつて母音の語幹末尾音をもっていたことは, 古サクソン語においてはもはや分明ではなく, 比較言語学の方法で再建された語形(*をつけた形)を見てはじめてわかるのが普通である。以下にあげる a- 語幹, i- 語幹などの分類もそのようなゲルマン祖語にもとづいた分類である。

弱変化名詞は古サクソン語においては, 各性単数1格(および中性単数4格)以外を -un, -on, -an など -n で作る名詞ということができる。

§ 3 a) 強変化 a- 語幹名詞(男性と中性)

dag m.「日」(独 Tag, 英 day)

単 1. dag	複 1. dagos, -as
2. dages, -as	2. dago
3. dage, -a	3. dagum, -n, -on
4. dag	4. dagos, -as
具 dagu, -o	

word n.「言葉」(独 Wort, 英 word)

単 1. word	複 1. word
2. wordes, -as	2. wordo
3. worde	3. wordum, -un, -on,

4. word

4. word

具 wordu, -o

b) ja- 語幹名詞 (男性と中性)

hirdi *m.* 「牧者」(独 Hirt, 英 herd)

単 1. hirdi

複 1. hirdios

2. hirdies, -eas

2. hirdio

3. hirdie, -ea

3. hirdium, -iun, -ion

4. hirdi

4. hirdios

具 hirdiu

rīki *n.* 「王国」(独 Reich; 英は bishopric の ric に)

単 1. rīki

複 1. rīki

2. rīkies, -eas

2. rīkio, -eo

3. rīkie, -ea

3. rīkium, -iun

4. rīki

4. rīki

具 rīkiu

c) wa- 語幹名詞 (男性と中性)

snēo, snēu *m.* 「雪」(独 Schnee, 英 snow)

単 1. snēo, snēu

2. snēwes

3. snēwe

4. snēo, snēu

§ 4 ō- 語幹名詞 (男性, 女性, 中性)

geba *f.* 「贈物」(独 Gabe)

単 1. geba, -e

複 1. geba

2. geba

2. gebono

- | | |
|-------------|--------------------|
| 3. gebu, -o | 3. gebum, -un, -on |
| 4. geba | 4. geba |

§ 5 i- 語幹名詞 (男性と女性 [中性は稀])

gast m. 「客人」(独 *Gast*, 英 *guest*)

- | | |
|-----------------------|-------------------------------|
| 単 1. <i>gast</i> | 複 1. <i>gesti</i> |
| 2. <i>gastes, -as</i> | 2. <i>gestio, -eo</i> |
| 3. <i>gaste, -a</i> | 3. <i>gestium, -iun, -ion</i> |
| 4. <i>gast</i> | 4. <i>gesti</i> |

dād f. 「行為」(独 *Tat*, 英 *deed*)

- | | |
|-----------------|------------------------------|
| 単 1. <i>dād</i> | 複 1. <i>dādi</i> |
| 2. <i>dādi</i> | 2. <i>dādio, -eo</i> |
| 3. <i>dādi</i> | 3. <i>dādium, -iun, -ion</i> |
| 4. <i>dād</i> | 4. <i>dādi</i> |

§ 6 u- 語幹名詞 (男性, 女性, 中性 [*fehu*のみ])

sunu m. 「息子」(独 *Sohn*, 英 *son*)

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 単 1. <i>sunu, -o</i> | 複 1. <i>sunī</i> |
| 2. <i>sunies, -eas</i> | 2. <i>sunio, -o</i> |
| 3. <i>sunu, -o; -ie, -i, -e</i> | 3. <i>sunum, -un, -iun</i> |
| 4. <i>sunu, -o</i> | 4. <i>sunī</i> |

hand f. 「手」(独 *Hand*, 英 *hand*)

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 単 1. <i>hand</i> | 複 1. <i>hendi, handi</i> |
| 2. (例なし) | 2. <i>hando</i> |
| 3. <i>hand, hendi</i> | 3. <i>handum, -on; -iun</i> |
| 4. <i>hand</i> | 4. <i>hendi, handi</i> |

§ 7 弱変化(子音変化) n- 語幹名詞(男性, 女性, 中性)

bodo *m.* 「使者」(独 Bote, 英 ∅bode 「前兆となる」)

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 単 1. bodo, -a | 複 1. bodon, -un, -an |
| 2. boden, -an, -on | 2. bodono |
| 3. boden, -an, -on | 3. bodon, -un |
| 4. bodon, -an | 4. bodon, -un, -an |

herta *n.* 「心(臓)」(独 Herz, 英 heart)

- | | |
|---------------------|------------------|
| 単 1. herta, -e | 複 1. hertun, -on |
| 2. herton, -en, -an | 2. hertono |
| 3. herton, -en, -an | 3. hertun, -on |
| 4. herta, -e | 4. hertun, -on |

tunga *f.* 「舌」(独 Zunge, 英 tongue)

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 単 1. tunga, -e | 複 1. tungun, -on, -an |
| 2. tungun, -on, -an | 2. tungono |
| 3. tungun, -on, -an | 3. tungun, -on, -an |
| 4. tungun, -on, -an | 4. tungun, -on, -an |

§ 8 r- 語幹名詞 (fader, bröder, swester, mōder, dohter 等の親族呼称名詞). これらは単数のすべての格と, 複数 1, 4 格において無変化である.

fadar *m.* 「父」(独 Vater, 英 father)

- | | |
|------------|--------------------------|
| 単 1. fadar | 複 1. fadar |
| 2. fadar | 2. (例なし) |
| 3. fadar | 3. (bröder に brōdrum あり) |
| 4. fadar | 4. fadar |

§ 9 その他の特殊変化名詞

man *m.* 「人間, 男」

単 1. man	複 1. man ; men
2. mannes, -as	2. manno, -a
3. man ; manne, -a	3. mannum, -un, -o
4. man	4. man ; men

naht *f.* 「夜」(独 Nacht, 英 night)

単 1. naht	複 1. naht
2. nahtes	2. nahto
3. naht, -a	3. nahtun, -on
4. naht	4. naht

naht と類似の変化をするものに burg 「城市」, bōk 「書物, 書き板」, ēk 「柏」, kō 「牡牛」, miluk 「ミルク」, magad 「乙女」などの女性名詞がある。

§ 10 固有名詞

子音で終わる固有名詞(人名, 地名とも)はだいたい該当する普通名詞強変化の活用をする: Krist (1 格) — Kristes (2 格) — Kriste (3 格) — Krist. -a に終わる女性名は弱変化である: Maria (1 格) — Mariun (2 格) — Mariun (3 格) — Mariun (4 格). Iudeo 「ユダヤ人」も弱変化する: 単数 Iudeo — Iudeon — Iudeon — Iudeon, 複数 Iudeon — Iudeono — Iudeon — Iudeon. 地方名は多くの場合, その土地の住民の複数 2 格形 + land であらわされる: Cananeo land 「カナン人たちの地, カナン」

II 代名詞

§ 1 人称代名詞

(i) 第1人称

単 数	両 数*	複 数
1. ik	wit	wī, wē
2. mīn	unkero, -aro	ūser
3. mī, me	unk	ūs
4. mīk, mī, me	unk	ūs

*両数（または双数, Dual）とは2人の場合に用いられる語形で,
wit は wī に数詞の twēna「2」のついたものと考えてよい.

(ii) 第2人称

単 数	両 数	複 数
1. thū	git	gī, ge
2. thīn	—	iuwar, euwar
3. thī	ink	iu, eu, giū
4. thīk, thī	ink	iu, eu, giū

(iii) 第3人称

単 数 <i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. hē, hī, hie	sia, sie, siu	it, et
2. is, es	ira, iro, iru	is, es
3. im, imu, imo	iru, iro	im, imu, imo
4. ina, ine	sia, sea	it, et
複 数 <i>m. f.</i>	<i>n.</i>	
1. sia, sea, sie	siu	
2.	iro	
3.	im	

4. sia, sea, sie siu

§ 2 再帰代名詞

ゲルマン祖語 *si- にもとづく古来の再帰代名詞形（現代ドイツ語 sich）は古サクソン語では全く消滅しており，代りに人称代名詞が用いられた。

§ 3 所有代名詞

単 数	両 数	複 数
1 人称 mīn	unka	ūsa
2 " thīn	inka	iuwa, euwa
3 " sīn* (男, 中のみ)	—	— *

* 3 人称女性単数および 3 人称全性複数については，人称代名詞 2 格形 īra, iro を援用する。sīn の代わりに is (es) が用いられることも多い。

これらの所有代名詞は原則として強変化形容詞（Ⅲ § 3）と同じ変化をするが，unka, ūsa 等は男性女性単数 1, 4 格，中性単数複数 1, 4 格では -a（または -e）の語尾を保持する。

§ 4 指示代名詞（定冠詞）

単 数	<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. sē*; thē, thie	thiu, thia	that	
2. thes	thera, -o, -u	thes, thas	
3. themu, -o, them	theru, -o, -a	themu, -o, them	
4. thena, -e, thana, -e	thia, -e, the	that	
具 —	—	thiu	

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

複 数	<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1.	thea, thia, thē		thiu
2.		thero, -a	
3.		thēm, thān	
4.	thea, thia, thē		thiu

*男性単数1格 *sē* は *the* とは別系統の語で (ゴート語 *sa*, 古英語 *se*), 古サクソン語では稀である。

古サクソン語において, 指示代名詞は定冠詞としても用いられるが, しかし定冠詞としての使用法はまだよく発達しておらず, 指示代名詞との区別は微妙である。定冠詞は所有代名詞とともに用いられることもある。

§ 5 関係代名詞

古サクソン語には特定の関係代名詞はなく, 指示代名詞 *the*, *thiu*, *that* を適宜用いるか, 固定的な無変化詞 *the* や *sō* を用いる。

§ 6 疑問代名詞

(i) *hwē* 「だれ」(独 *wer*, 英 *who*)

- 単 1. *hwē*, *hwie*
 2. *hwes*
 3. *hwem(u)*
 4. *hwena*, -e

(ii) *hwat* 「なに」(独 *was*, 英 *what*)

- 単 1. *hwat*
 2. *hwes*
 3. *hwem(u)*
 4. *hwat*

具 hwī, hwiu, hweo, hwō, huo, hū

§ 7 不定代名詞

(i) man 「(不特定の) だれかある人, 世の人, 人びと」(独 man, cf. 英 one, 仏 on) man は 1 格でしか用いられない.

(ii) sō hwē sō 「だれであれ, だれでも」
sō hwat sō 「なんであれ, なんでも」

Ⅲ 形容詞

§ 1 形容詞も名詞と同様に男性, 女性, 中性という 3 種の性と, 単数, 複数という 2 種の数, 1 格から 4 格(また具格)までの格をもち, 修飾される名詞の性, 数, 格に応じた語尾変化をする.

§ 2 形容詞の語尾変化は名詞同様に強変化と弱変化の 2 種である. 強変化のみに活用されるものに all (独, 英 all), manag (独 manch, 英 many), ful (独 voll, 英 full), half (独 halb, 英 half), ginōg (独 genug, 英 enough), faho (英 few) などの数量形容詞がある.

弱変化は: a) 定冠詞の後に形容詞が来たとき, b) ある種の固定表現として無冠詞で名詞的に用いられるとき(たとえば gramo 「敵なる者, 悪魔」), c) すべての比較級において, d) 大部分の最上級において, 用いられる.

§ 3 形容詞の強変化

(i) a-, ō- 語幹
ald (独 alt, 英 old)

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

単 数 <i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. ald	ald	ald
2. aldes, -as	aldera, -ara	aldes, -as
3. aldum, -n, -on,	alderu, -aru	aldum, -n, -on,
4. aldan, -on, -en*	alda, -e	ald

具 aldu, -o

複 数

1. alde, -a	alda, -e	ald
2.	aldaro, -oro, -ero, -era, -ara	
3.	aldum, un, -om, -an	
4. alde, -a	alda, -e	ald

*hēlag (独 heilig, 英 holy), sālīg (独 selig), luttīl (英 little) のような長音綴語幹+短音綴語尾の形容詞は, 男性・単数・4格で hēlagna, または -e のように -na, -ne という形をとる.

(ii) ja-, jō 語幹

男性, 女性の単数, 1格, 中性の単数・複数・1・4格において -i で終わる以外は, a-, ō- 語幹とまったく同じ変化をする: middi (独 mittel, 英 middle) (各性・単・1) — middies (男・中・単・2) — middiumu (男・中・単・3) — middian (男・単・4)

(iii) wa-, wō- 語幹

ここに属する形容詞も男・女・単・1, 中・単・複・1・4以外は, a-, ō- 語幹と同変化である: glau「賢い」(各性・単・1) — glauues (男・中・単・2) — glauwum (男・中・単・3) — glauwan (男・単・4)

§ 4 形容詞の弱変化

弱変化名詞と同じく、-an, -on などの -n を中核とする語尾をもって、各性単数 1 格および中性単数 4 格を除いた全格語尾変化を作る。

単 数 <i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. aldo, -a	alda, -e	alda, -e
2. alden, -an, -on	aldun	alden, -an, -on
3. alden, -an, -on, -un	aldun, -on, -an	alden, -an, -on, -un
4. aldun, -an	aldun, -on, -an	alda, -e

複 数

1. aldun, -on, -an
2. aldono
3. aldum, -un, -on
4. aldun, -on, -an

弱変化の使用方法についてはⅡ § 2 参照。

§ 5 比較

(i) 比較級は原級に -ira, -ora, -ara, -era, またはその簡縮形 -ra を付けて作る。(-ira は alt, eng, lang, mildi, spāhi など特定の形容詞にしか用いられない。) 比較級の変化は上述のように (Ⅱ § 2), 弱変化である。

(ii) 最上級は-ōsta, -istaを付けて作るが, -ista は ald, nāh や, -ja 語幹の triwi などにしか用いられない。最上級もたいていは弱変化であるが, 各性単数 1 格, 中性単数 4 格では強変化も用いられる。

(iii) 不規則な比較級, 最上級

原級と比較級, 最上級の語源が異なるもので, この不規則性はゲルマン祖語にさかのぼる。

gōd — betera, -ara — bezto (独 gut — besser — best ; 英 good — better — best)

ubil — wirsa — wirsista, wirristta (独 übel — — ; 英 evil — worse — worst)

mikil — mēra — mēsta (独 — mehr — meist ; 英 much — more — most)

luttli — minnera, -ara — minnista (独 — minder — mindest ; 英 little — —)

IV 副詞

(i) 形容詞に -o (写本によっては -a) という接尾辞を付けて、副詞を作ることができる : lango「長い間」 (<lang), hluttro「声高に」 (<hluttar [独 laut, 英 loud]), garo「まったく, 完全に」 (<garu [独 gar, 英 yare]). ただし gōdからはこのタイプの副詞は作れず, 別語源の wel(a), wala, wola (独 wohl, 英 well) を用いなければならない.

(ii) 副詞の比較級, 最上級

形容詞原級に -or, -ur という語尾をつけて副詞の比較級が作られる : diopor (独 tiefer, 英 deeper). 最上級は形容詞の最上級の無変化形を用いる : widest「最も遠く」(独 am weitesten), ērist「まず最初に」(独 erst). 上述の不規則な形容詞比較, 最上級 (Ⅲ § 5 [iii]) に対応する副詞形およびその他の固定的な比較の副詞をあげる :

bet, bat (独 besser, 英 better) ; bēzt, best (独, 英 best) ; wirs (英 worse) ; mēr (独 mehr, 英 more) ; mēst (独 meist, 英 most) ; hald「より多く」; lēs (英 less) ; ēr (独 eher, 英 ere) ; ērist (独 erst, 英 ∅ earliest) ; sīd, -or, -ur「後刻に」(∅独 seit, ∅英 since) ; leng (langoの比較級)

その他の使用頻度の高い副詞で注意すべきもの:

(i) 場所的

thār「その場所で」— thar(od)「そこへ」— thanan「そこから」

hēr, hīr「ここで」— herod「ここへ」— hinan(a)「ここから」

hwar「どこで」— hwar(od)「どこへ」— hwanan(a)「どこから」

(ii) 時間的

thō「すると、その時」(独 da); than(na)「それから」(独 dann, 英 then)

*thār は thō や than と同義に時間的に用いられることもある。

V 数詞

§ 1 基数

1 ēn

2 twēne (*m.*), twō, twā (*f.*), twē (*n.*)

3 thria, -e, threa (*m. f.*), thriu, thrū (*n.*)

4 fiuwar, fior, fiar, fier

5 fif

6 sehs, ses

7 sidun, -on, -en

8 ahto, -e

9 nigun, -on, -en

10 tehan, -hin, tian, tein

11 el(l)evan, -en

12 twelif, twi-, twu-

13 thriutein, thrū-

14 fiertein

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

- 15 fifein
- 16 sehstein, ses-
- 17 siḥuntein
- 18 ahtotein, ahte-
- 19 nigentein
- 20 twēntig
- 21 ēn endi twēntig
- 30 thrītig
- 40 fiuwartig, fior-, fiar-, etc.
- 50 fiftig, -tech
- 60 sehstig
- 70 antsidunta
- 80 antahtoda
- 90 (ant)nigonda
- 100 hund, hunderod
- 1000 thūsundig

70, 80, (90) は古英語 hundseofontig, hundeahtig, hundnigontig の影響下に, hund の代わりに前綴 and- という形をとって成立したものらしい。hund の原義は「10」で, だからたとえば古サクソン語 antsidunta は「第7番目の10」となる。-sidunta, -ahtoda, -nigonda が序数詞であることに留意すべきである。

§ 2

1 から 3 までの基数詞は形容詞として変化する. *ēn* の強変化形は不定冠詞としても用いられる.

twēne の変化 :

<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. <i>twēne</i> , -a	<i>twō</i> , <i>twā</i>	<i>twē</i>
2.	<i>tweio</i>	
3.	<i>twēm</i> , -n	
4. <i>twēne</i> , -a	<i>twō</i> , <i>twā</i>	<i>twē</i>

thria の変化:

<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. <i>thria</i> , -e, <i>threa</i>		<i>thriu</i> , <i>thrū</i>
2.	<i>thrīo</i>	
3.	<i>thrim</i>	
4. <i>thria</i> , -e, <i>threa</i>		<i>thria</i> , <i>thrū</i>

§ 3

4 から 12 までの基数は, 形容詞的に (付加語的に) 用いられるとき, 無変化である. しかし名詞的に用いられると次のように *i*- 変化をする.

<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. <i>siḅuni</i>		
2. <i>siḅunio</i>		
3. <i>siḅuniun</i>		
4. <i>siḅuni</i>		

§ 4

13 以降の基数は無変化である。

数詞は元来名詞であったから、複数 2 格名詞をとまうのが普通である：

twēntig wintro (<wintar) 「20年」, gumono (<gumo) fif thūsundig
「5000人の人びと」

§ 5 序数詞

第 1. ērist, furist, formo

2. ôdar

3. thriddio

4. fiordo

5. fifto

6. sehsto

7. sibondo, sibotho

8. ahtodo

9. nigunda, niguda

10. tehando, tegotho

11. ellifto

序数詞の変化は, ērist と furist は強弱どちらにも, formo は弱変化, ôdar は強変化, そして thriddio 以下の基数から作られた序数はすべて弱変化である。

VI 動詞

§ 1 他のゲルマン系諸言語と同じく, 古サクソン語の動詞は, 強変化動詞と弱変化動詞とから成る。強変化動詞は語幹母音の特殊な変化(母音交替, 独 Ablaut, 英 gradation)によって時制・数・話法など各種の機

能を表わすが、弱変化動詞はこの種の変化がなく、語尾変化として-da, -ta (過去), -od, -id (過去分詞)などを語幹に付けて時制変化形を作る。この -d, -t 系の語尾綴は dōn (独 tun, 英 do) に由来すると考えられる。

§ 2 態

動詞自体としては能動態形しかない。受動態は、助動詞 *wesan* (独 *sein*, 英 *be*) または *werdan* (独 *werden*) と過去分詞という形で表わされ、おおむね *wesan* の場合は状態受動、*werdan* の場合は動作受動である。

§ 3 話法

直接法、接続法 (仮定法、希求法)、命令法の三話法がある。接続法はある事象をだれかの思考の一部として述べる話法で、したがって願望、条件、疑念、間接引用などを表わすことが多い。

§ 4 時制

母音交替や活用語尾によって表わされる時制には現在と過去の二種類しかない。未来は助動詞 *skulan* + 不定形で表わされることがあり、現在完了や過去完了は *hebbian* (独 *haben*, 英 *have*), *ēgan* (英 *own*), *wesan*, *werdan* + 過去分詞という形で表現される。完了の助動詞 *wesan* と *werdan* は変化や移動を示す自動詞とともに用いられ、*hebbian*, *ēgan* はその他の自動詞や他動詞とともに用いられる。(ただし *gangan* [独 *gehen*, 英 *go*] が *hebbian* をともなっている例もある。) 未来においても完了においても *skulan* や *hebbian* 等はその本来の意味を色濃く残しており、純粹の時制の助動詞と考えるべきではない。現代の独語や英語で時の助動詞を用いた未来形や完了形が普通である内容の多くは、古サクソン語においては助動

詞なしの単純な現在形や過去形で表わされているのである。

§ 5 数

数は単数と複数の2種だけで、両数はない。単数のみ3種の人称変化があるが、複数は1, 2, 3人称とも同形である。

§ 6 次に強変化動詞 *helpan* (独 *helfen*, 英 *help*) と弱変化動詞 *nerian* 「救助する」の変化形を示す。この語尾変化はほとんどすべての動詞に適用できるものである。

<強変化動詞 *helpan*>

直接法現在		接続法現在
ik	hilpu, -o	helpe, -a
thū	hilpis	helpes, -as
hē	hilpid, -it, -id	helpe, -a
wī	} helpad, -at, -ad	helpan, -en
gī		
sia		
直接法過去		接続法過去
ik	halp	hulpi
thū	hulpi	hulpis
hē	halp	hulpi
wī	} hulpun, -on	hulpin
gī		
sia		

命令法

(thū:) hilf! (gī:) helpad, -at, -ad!

現在分詞 : helpandi, 過去分詞 : giholpan, -en

<弱変化動詞 nerian>

直接法現在

ik neriu

thū neris

hē nerid, -it, -iđ

wī

gī

sia

} neriad, -at, -ađ

接続法現在

nerie

neries

nerie

nerien

直接法過去

ik nerida

thū nerides

hē nerida

wī

gī

sia

} neridun, -on

接続法過去

neridi

neridis

neridi

neridin

命令法

(thū:) neri!

(gī:) neriad, -iađ!

現在分詞 : neriandi 過去分詞 : ginerid, -it

§ 7 強変化動詞の種類

強変化動詞は母音交替のタイプによって6種に分類されるが、この他にいわゆる「反復動詞」も強変化動詞に属させるのが通例である。

母音交替(独 Ablaut, 英 gradation)の主要部分は、(1)不定形、(2)直接法現在1人称単数、(3)直接法過去1人称単数、(4)直接法過去1人称複数、(5)過去分詞、である。

第1種: grīpan 「つかむ」(独 greifen, 英 gripe)

— grīpu — grēp — gripun — gigrepan

第2種: biotan 「提供する」(独 bieten, 英 ∅ bid)

— biudu — bōd — budun — gibotan

第3種: bindan 「縛る」(独 binden, 英 bind)

— bindu — band — bundun — gibundan

第4種: stelan 「盗む」(独 stehlen, 英 steal)

— stilu — stal — stālun — gistolan

第5種: geban 「与える」(独 geben, 英 give)

— gibu — gaf — gābun — gigeban

第6種: faran 「行く」(独 ∅ fahren, 英 ∅ fare)

— faru — fōr — fōrun — gifaran

これによって他の変化形をも知ることができるわけであるが、その際、次の点に留意する必要がある: 1) 幹母音 io と e は、その後に i または u が来ると、それぞれ iu と i とに変わる: biotan → ik biudu, thū biudis, hē biudid; stelan → ik stilu, thū stilis, hē stilid. 2) 幹母音 a はその後に i が来ると e に変わる: faran → thū feris, hē ferid. 3) 直接法過去単数2人称は、過去複数形の語幹に i をつけて作られる: biotan → ik bōd, thū budi; werden 「に成る」(独 werden) → ik ward, thū wurdi, wīwurdun; kīosan 「選ぶ」(英 choose, 独 [雅] kiesen) → ik kōs, thū kuri, wī kurun.

反復動詞: ゴート語でたとえば haitan 「という名である」(独 heißen) は、その過去形を ik hāihait, wīhāihaitun のように頭音節反復によって表わした。西ゲルマン語に至って頭音節反復そのものは消失したが、なお

一定の母音変化として痕跡をとどめている:

1. 幹母音が a, ā, ē の場合:

haldan (独 halten, 英 hold) — haldu — held — heldun — gihaldan

lātan (独 lassen, 英 let) — lātu — lēt — lētun — gilātan

hētan (独 heißen) — hētu — hēt/hiet — hētun/hietun — hētan

2. 幹母音が ō の場合:

stōtan 「押す」(独 stoßen) — stōtu — stiot — stiotun — gistōtan

hrōpan 「叫ぶ, 呼ぶ」(独 rufen) — hrōpu — hriop — hriopun —

gihrōpan

この反復動詞 (reduplizierende Verben) は, 強変化動詞第 7 種と見なすのが实际的である.

§ 8 弱変化動詞

弱変化動詞は起源的には強変化動詞より新しく, あるいは他品詞から (たとえば fremmian 「推進する」 <fram 「進んで」), あるいは強変化動詞から (たとえば settian [独 setzen, 英 set] <sittian [独 sitzen, 英 sit] の過去形, すなわち settian は「坐った状態にさせる」こと) 作られた派生動詞である. 弱変化動詞の過去と過去分詞の変化語尾 -da, -ta, -od, -id は, § 1 で述べたように, dōn (英 do, 独 tun) に由来すると考えられている. つまり ik fremida は「事柄が進むように私はおこなった」が原義であったと思われる.

弱変化動詞には以下の 3 種がある.

1. -jan 動詞. これはゴート語の語形にもとづく名称で, 古サクソン語では -ian, -ien, -ean という不定詞形となる. 語幹母音の長短によって過去形, 過去分詞形がやや異なる. 短語幹母音の場合: nerian 「救う」 — nerida. 長語幹母音の場合: mēnian 「思う」(独 meinen, 英 mean) —

mēnda ; dōpian 「洗礼をさづける」(独 taufen) — dōpta. 短い語幹母音の場合でも, -ll-, -tt-, -kk-, -dd-, -gg- のような複子音が続くと, tellian (英 tell, 独 erzählen) — talda — gitald ; settian (英 set, 独 setzen) — setta — giset, のごとくである。

2. -ōn 動詞. 古サクソン語ではすでに -on という短音節になっている。ここに属するものをいくつかあげると : makon (英 make, 独 machen), bedon 「祈る」(独 beten, 英 𐛆bid), frāgon 「尋ねる」(独 fragen), thionon 「仕える」(独 dienen), など。

3. -ai- 動詞. ゴート語の -ai- 動詞のほとんどすべては古サクソン語において -ōn 動詞になっているが, ただ hebbian (独 haben, 英 have), seggian (独 sagen, 英 say), libbian (独 leben, 英 live) の 3 語のみが部分的に(直接法現在単数 2, 3 人称, 命令法単数 2 人称)古形を保持している。しかしこの 3 語ともその他の変化形は -jan 動詞のそれと同じになっているのである。hebbian は使用頻度の高い重要動詞(完了助動詞としても用いられる)なので, その変化形をあげておく。

<hebbian, -ien>

直接法現在		接続法現在
ik	hebbiu	hebbie
thū	habes, -as	hebbias, -es
hē	habad, -ed, -id	hebbea, -ie
wī	hebbiad, habbiad	hebbean, -ian, -ien
gī		
sia		
命令法		

(thū:) habe, -ba! (gī:) hebbead, hebbiad, habbiad!

直接法過去	接続法過去
-------	-------

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

ik	habde, -bda	— (用例なし. 以下同じ)
thū	habdes	—
hē	habda, -de	habdi, -bdi
wī	} habdon, -un	habdin
gī		
sia		

過去分詞 : gihabd, gihad

§ 9 過去現在動詞 (Praeterito-Praesentia)

もともとは強変化動詞であったのが, その過去形が現在の意味を帯びるようになって, 新たに弱変化の過去形を作りあげたものである. そのいくつかをここに示す.

<witan> 「知っている」 (独 wissen, 英 ∞ wit)

直接法現在		接続法現在
ik	wēt	—
thū	wēst	—
hē	wēt	witi
wīetc.	witun	witin
直接法過去		接続法過去
ik	wissa	—
thū	—	—
hē	wissa, -se	wissi
wīetc.	wissun	wissin

現在分詞 : witandi 過去分詞 : giwitan

<ēgan> 「持っている」 (独 ∞ eigen, 英 ∞ own)

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

直接法現在		接続法現在
ik	—	ēgi
thū	—	—
hē	—	ēgi
wīetc. ēgun		ēgin
直接法過去		接続法過去
ik	—	—
thū	—	—
hē	ēhta, -e	ēhti
wīetc. ēhtun		—

§ 10 話法助動詞

これらは語構成上すべて § 9 の過去現在動詞に含まれるが、便宜上ここに要点をまとめておく。

<kunnan> (独 können, 英 can)

直接法現在	直接法過去	接続法過去
ik kan	—	—
thū kanst	—	—
hē kan	konsta, -e	konsti
wī etc. kunnun	konstun	—

<gidurran> 「敢えてする」(英 dare)

直接法現在	直接法過去	接続法過去
ik gidar	—	—
thū —	—	—
hē —	gidorste	gidorsti

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

wīetc. — gidorstun gidorstin

<skulan> (独 sollen, 英 shall)

	直接法現在	直接法過去	接続法現在	接続法過去
ik	skal	skolda, -e	——	——
thū	skalt	——	——	skoldis
hē	skal	skolda, -e	skuli	skoldi
wīetc.	skulun	skoldun	skulin	skoldin

<mugan> 「能力がある」(独 mögen, 英 may)

	直接法現在	直接法過去	接続法現在	接続法過去
ik	mag	——	mugi	——
thū	——	mahtes	mugis	mahtis
hē	mag	mahte, -a	mugi	mahti
wīetc.	mugun	mahtun	mugin	mahtin

<mōtan> 「できる, ねばならぬ」(独 müssen, 英 must)

	直接法現在	直接法過去	接続法現在	接続法過去
ik	mōt	——	mōti	——
thū	mōst	——	mōtis	——
hē	mōt	mōsta	mōti	mōsti
wīetc.	mōtun	mōstun	mōtin	mōstin

§ 11 不規則動詞

<wesan> (独 sein, 英 be)

	直接法現在	直接法過去	接続法現在	接続法過去
ik	bium, -un	was	sī	——
thū	bis, bist	wāri	sīs	wāris
hē	is, ist	was	sī	wāri

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み

wīetc. sind, -on wārun, -on sīn wārin

命令法 (thū:) wis! (gī:) wesat, -ad!

現在分詞: —— 過去分詞: —— (英語やドイツ語で過去分詞
been/gewesen が登場するのは中英語／中高ドイツ語の時代になってから
である.)

<dōn> (独 tun, 英 do)

	直接法現在	直接法過去	接続法現在	接続法過去
ik	duom, dom, -n	——	——	——
thū	dos, duos	dādi, dedos	duoas	——
hē	d(u)ot, doid	deda, -e	doe, dua, -e	dādi, dedi
wīetc.	duod, dod, -t	dedun, dadun	duon, -an	dedin

命令法 (thū:) dō, duo! (gī:) dot, duat, duot!

現在分詞: —— 過去分詞: gidōn, -uan

[続く]